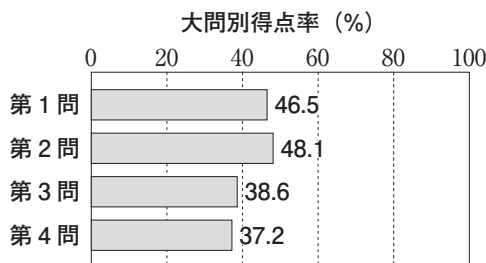
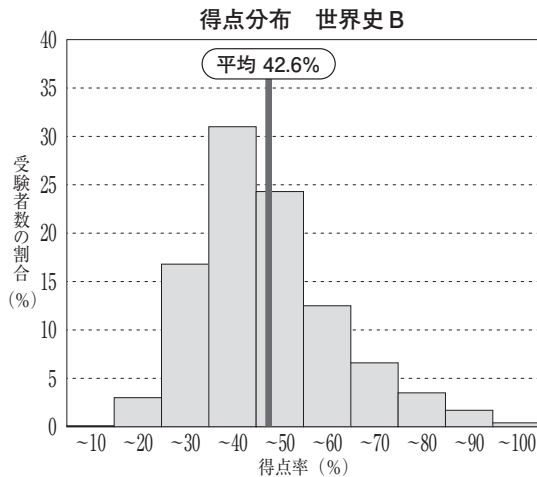


世界史B

近現代史の学習を着実に進めよう！

I. 全体講評

今回の平均点は42.6点で、第1回の模試(39.9点)から順調な伸びを見せている。ただし、現代史については5問すべてが戦後史であった結果、正答率が抑えられたようである。既習であろう古代史・中世史については、地域・出題形式を超えて安定してきたと考えられる。古代・中世史で正答率が低かった問題はセンター試験としては難易度が高く、今の段階では仕方がないと言えよう。



II. 大問別分析

第1問 人類の移動や移住の歴史

基本的な事項の年号、場所の位置をしっかりと確認しよう。

第1問の得点率は46.5%であった。特筆すべき

は、古代のユダヤ人について問う[2]の正答率が78.9%と今回最も高かったことである。古代史の基本が押さえられている証左であろう。一方、近世史・近代史の複合問題である[5]の正答率が64.2%であったのは、今の段階では満足すべき結果と言える。同じく近代のタンジマートとミドハド憲法について問う[9]の52.1%も同様である。これに対して、中世ヨーロッパのフリードリヒ2世を答えさせる[3]の32.6%、中世アジアのセルジューク朝についての問題である[8]の43.3%、近代北アメリカのフロンティア消滅を答えさせる[6]の37.0%は、いずれも基本問題であるから、これらの結果は残念なものであった。キャプタ条約の時期を答えさせる[4]の47.1%は、雍正帝がこの条約を結んだこと、康熙・雍正・乾隆の順番が頭に入っていればできる基本問題と考えられるので、若干不満が残る。サンチャゴ=デ=コンポステラについて問う[1]とウイグルがマニ教を受容したことを答えさせる[7]は、それぞれ31.4%、26.8%という結果であった。この2問はセンター試験の問題としては難問であるので、仕方がないかもしれない。しかし、「ウイグルが黄巢の乱の際に、唐を援助した。」という誤肢を正文とした受験者が38.5%もいた。黄巢の乱と安史の乱とを混同した結果であろう。

第2問 世界史上の思想や文化

国際的なニュースに関心を持とう。

第2問の得点率は48.1%と4大問中最も高かった。ほとんどの問題が前近代の問題であったからであろう。デモクリトスを答えさせる[10]の正答率61.4%、イスラームの学問について問う[13]の60.0%は既習済みの基本事項がしっかり定着していた結果であろう。スコラ学とイブン=パットウータについて問う[11]の51.9%、アメリカ独立宣言に関する[17]の54.8%、オランダの独立を答えさせる[18]の53.9%という結果は、いずれも基本事項ではあるものの、現段階では健闘したと考えられる。ポローニャ大学を答えさせる[12]の40.5%とマラッカ王国を答えさせる[15]の43.2%は、どちらも基

本的な問題であるから、残念な結果であった。文化史と東南アジア史は学習が行き届かなくなりがち単元ではあるが、本試で頻繁に出題されるのできちんと押さえておく必要がある。第2問で最も正答率が低かったのはスンナ派とシーア派について問う[14]で、29.2%であった。現在のイランがシーア派の国であることは、ニュースを見聞きしていれば必ず触れる一般常識である。世界史受験の際、現在、世界の国々がどうなっているか常に興味を持つ必要がある。近代フランス史の年代整序である[16]の33.2%という結果についても、ルイ＝ナポレオン登場、プロイセン＝フランス戦争敗北（ナポレオン3世退位、第三共和政成立）、ドレフュス事件という流れがわかっているならば、そう難問とは考えられない。歴史の基本的な流れをつかもう。

第3問 世界史上の帝国

近現代史学習にしっかり取り組もう。

この大問の得点率は全問平均より低い38.6%であった。第3問で最も良かったのはゾロアスター教を答えさせる[25]で、60.3%であった。また中世ヨーロッパの税制と明の一条鞭法についての[23]の51.5%も良い結果であった。どちらも古代・中世の基本の問題であるので、安心できる結果である。これに対してカール4世を答えさせる[19]の43.2%、漢滿併用制を答えさせる[22]の47.9%、カルカッタについての[27]の30.6%は、いずれも基本的な問題であるから残念な結果である。ホセ＝リサルを答えさせる[21]の35.6%という結果は、世界史に登場するフィリピンの人物がホセ＝リサルとアギナルドぐらいであることからして、もう少し出来てほしいと思われた。全問中、最も正答率が低い[26]の22.7%については、インドのヴィジャヤナガル王国とマラーター王国という最も学習が行き届かなくなりやすい地域と時代であることから、現段階ではこの結果は仕方がないかもしれない。全問中ワースト2の[20]の23.2%については、そうも言えない。1555年のアウクスブルクの和議で領邦教会制が始まり、1598年のナントの王令（勅令）でユグノーの信仰が認められ、スチュアート朝成立後の1620年のピルグリム＝ファーザーズがアメリカ大陸に上陸とした、いう流れはヨーロッパ近世史の基本であろう。残念な結果である。また北京条約を答えさせる[24]の28.6%についても、公行の廃止は

アヘン戦争の南京条約の内容だということは、東アジア近代史の基本である。

第4問 世界史上の覇権国家

中学校で習った日本史を復習しよう。

第4問の得点率は37.2%と全大問中最も低かった。原因は、現代史とりわけ第二次世界大戦後の世界の問題が5問あったことであろう。その中で初の人工衛星成功がソ連であったことを答えさせる[34]は48.6%と比較的高かった。世界史以外から受験者が知識を得ていた結果かもしれない。同じく第4問で最も正答率が高かった、毛織物工業とブラジルを答えさせる[28]の49.0%についても、受験者が有していた常識によるものであろう。日本史と関連する朝鮮通信使の時期を答えさせる[29]の28.6%と台湾について問う[30]の43.6%については、中学校段階の日本史がきちんと定着していれば出来たはずなので、不満足な結果である。近代ヨーロッパ史についての[31]は、ドラクロワの「民衆を導く自由の女神」の主題が七月革命だとわからなければ解けない問題であり、かつカルボナリの蜂起が七月革命に影響されて起こったことは教科書にも出ていない場合が多いことからやや難問と言える。正答率31.7%は満足すべき結果であろう。何れも現代史である、鄧小平を答えさせる[32]の32.9%、キューバ革命を答えさせる[33]の38.3%、公民権法を答えさせる[35]の25.9%、第1次石油危機の時期を答えさせる[36]の38.1%は現段階ではこんなものではないか。今後の現代史の学習での伸びに期待したい。

Ⅲ. 学習アドバイス

◆基本を確実に身につけよう。

センター試験では様々なテーマのリード文に基づいて設問が出されるが、各小問自体は教科書レベルの基本的知識で十分に対応できるので、幅広い基礎力の養成がポイントとなる。その際に地図や図版などを合わせて参照し、立体的な学習に努めることを必ず実践してほしい。また、世界史は現代の世界に直結している。毎日の海外のニュースを興味を持って見聞きしよう。